

# アフリカで医療ボランティア10回

形成外科医師 <sup>かみとしあき</sup> 上 敏明さん 64  
(愛西市)



静岡県沼津市出身。昭和大医学部卒業。慶応大で博士号を取得し、同大病院、藤田保健衛生大病院などを経て、1987年に名古屋市中村区で、2004年に愛西市で形成外科クリニックを開業。13年には老人保健施設も開業した。同市で妻と暮らす。

西アフリカ・コートジボワールで続けている医療ボランティア活動が、先月、10回の節目を迎えた。

きっかけは、アフリカで活動するキリスト教宣教師から「多くの人が口唇裂に苦しんでいる」という話を聞いたことだった。口唇裂は生まれつき唇の一部が裂けている先天性異常で、自らの専門分野でもある。「とにかく行ってみ

## 手術施設「ぜひ現地に」

よう」。2000年11月、妻の誠叔さんと2人、手術道具を携えて初めて現地を訪れた。

に穴があき、ホテルの壁には砲弾の跡。街で小銃を構えた兵士に出くわしたこともあり「ます」

日本から飛行機を乗り継いで約27時間。1999年にク

現地では、大人の患者が多いことに驚いた。乳児の頃に無料で手術が受けられる日本と違い、数百万円の費用がかかる。「手術したくてもお金がなく、そのまま成人する人

後のケアにも力を注ぐ。「日本から来た上先生」として慕われ、ヘルメットに付けたライトで手元を照らしながら手術する姿もおなじみだ。今では、隣国のマリやブルキナファソからも、人づてに聞いたラジオの告知を頼りに、数百キロ歩いて手術を受けに来る患者もいるほどだという。

このコーナーでは、様々な分野で奮闘する愛知の人たちを紹介していきます。

(三戸慶太)

が勃発したコートジボワールは、10年の大統領選に端を発した混乱で内戦状態に陥るなど、政情不安が続く。「道路

が多いということですが」

1、2年ごとに赴き、主要都市・アビジャンにある民間の外科医院を借りて手術を行っている。だが、処置室は薄暗く、空調は一般家庭用のエアコンが付いているだけ。日本では当たり前前の電気メスマニターも、5年ほど前によくやく導入された。

費用はすべて自分もち。渡航期間1週間のうち、現地での滞在は2日間だったが、1回で30人ほどを手術し、その

その数年前は、後輩で慶応大病院の清水雄介医師も同行。「培った技術を現地で生かしながら、現地での経験を日本の仕事に役立てています」と二人三脚で取り組む。

気温が40度を超す日も珍しくない環境での活動は楽ではないが、いつかかなえない夢がある。「現地に形成外科センターのような施設を建て、いつでも手術が受けられるようにしたい」。日本での仕事を頑張りながら、夢の実現を目指して、今後も現地に足を運ぶつもりだ。